

西の菜時記

特集：没後50年 山口生まれの実業家 鮎川義介の足跡

◆山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360◆

平成29年3月31日発行
第44号

発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

卒業後は、誰もがエリートコースに進む中、あえて「一職工」として現場で働くことを選びました。芝浦製作所で二年間職工として働き、休日は弁当持参で東京近郊の工場見学に廻ったそうです。そうして西洋の技術に依存した日本の姿に危機感を持った義介はアメリカへ留学、工場で働き、技術の習得と経営上の自信を得て帰国しました。

そのような中、ビリオン神父との出会いは、義介に「思いついたことはどこまでもやりとおす精神」を育みました。義介は父の影響で少年の時にミサに通い、様々な教えや英語を学びました。その後、父は神父と仲違いがあり、教会を脱退しますが、義介は交友を続けました。もう一人、義介が後に「人生の大恩人」と語ったのが、明治の経済界に君臨し、菜香亭の名付け親でもある井上馨です。井上馨は、義介の母の伯父で遠縁にあたりました。馨は鮎川家の貧しい暮らしを知り、義介を精神的・経済的にバックアップしました。日清戦争の勝利で湧いていた頃なので、日本の若者は政治家や軍人になろうとする傾向がありました。義介もその一人でしたが、ある日井上馨直々に助言をうけました。「これからの時代はエンジニアが必要だ。国の富をつくる実業家になれ。」と。将来の目標が定まった義介は猛烈に学業に励み、明治33年東京帝国大学工科大学機械科に進学しました。



企画展より。山口大学ポスターより

鮎川義介は元藩士の長男として、明治13年(1880)山口市大内に生まれました。士族のプライドが強いがゆえに家族に貧困をもたらす父の姿が、後に大実業家となる義介の反骨精神を培ったと思われる。

没後50年 一代で財閥を作った 山口生まれの実業家 鮎川義介



晩年の鮎川義介

鮎川義介は昭和28年参議院議員になり、日本の産業の基盤を支える中小企業の支援・助成を政治の側からはかることに専念しました。機知に富み、自分は損をしても弱者を放っておけない志の貴い義介の存在は没後50年を経て、世界情勢が不安定な今日に一筋の光のように見えます。

至誠天日を貫く技術者、実業家をへて政治家へ
明治43年30歳のとき、戸畑鑄物株式会社(現 日立金属)を設立。何度か経営のつまづきはありながら、第一次世界大戦による好景気で業績は向上し、経営面でも日本初の株式会社方式による日産コンツェルンを発足させ、三井・三菱に次ぐ財閥に成長させていきました。昭和8年には、最初の純国産車を作ったダットサン自動車製造株式会社を傘下に入れ、横浜に広大な敷地を買い、日産自動車株式会社を設立しました。今や世界的自動車会社となった日産の始まりです。次にとつた戦略は「満州国」への進出でした。国家的なプロジェクトに取り組むという男のロマンと既成財閥への対抗心が義介を満州に駆り立てました。昭和12年満州重工業開発(株)を設立、世界的規模の重化学工業地帯建設に向けて動き出しました。ところが、義介が実際に現地調査を行ったところ、期待したほどの資源がないという現実をつきつけられ、また、軍部が絶えず経営に介入し、義介の構想は崩壊しました。失意の中昭和17年総裁を退任し日本へ帰国しました。終戦後、義介は戦犯容疑を受け巣鴨拘留所に収監されました。義介はそこを「巣鴨大学」と呼んで国づくりを考える期間と位置づけ、学習にいそしみました。2年後、国づくりの課題を「道路」「水力」「中小企業」の3つであると結論づけ、「道路計画調査会」の立ち上げや、(株)中小企業助成会の設立など、活発に活動を開始しました。

◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

<市民ギャラリー出展作品の紹介>

笑顔の輪がひろがる山口絵手紙作品展

—山口絵手紙ぼすと倶楽部— 3/8~3/13



【自分の創作活動発表の場を探している方へ】

山口市在住、もしくは山口市でお仕事をされている方には、菜香亭会議室を利用料を免除して貸し出しています。

出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。

(お問い合わせ) TEL:083-934-3312

FAX:083-934-3360

<平成29年度 市民ギャラリーの予定>5・6月

月日	時間	タイトル	主催者
5/12 ~14	10時~17時(最終日のみ16時まで)	やまぐちの四季絵画展 part2	なのはな絵画クラブ
6/10 ~11	9時~17時(最終日のみ16時まで)	ひろまり絵画教室展~創造性豊かな山口の子どもたち~	ひろまり絵画教室



アートも楽しめる
菜香亭にさあいこう!

菜香亭界限史跡めぐり④

一の坂川のホタル護岸

一の坂川は、第24代当主の大内弘世が、一の坂川を京都の鴨川に見立てて街づくりを行ったと言われてい

ます。そして、一の坂川の蛍は、弘世が京より迎えた姫君のために、宇治の蛍を取り寄せ、これが山口に土着したと言

ひ伝えられています。昭和10年(1935年)には「山口ゲンジボタル発生地」として、国の天然記念物に指定され、蛍が生育する一の坂川の環境が周辺住民や山口市民に親しまれていました。

しかし、昭和46年(1971年)8月の台風19号により、蛍が生息していた後河原地域は河床や橋が流されるなど甚大な被害を受けました。

一の坂川の河川管理者である山口県は、当初は「コンクリートとブロック護岸」による三面張りの改修を計画していましたが、地域住民のゲンジボタル生息地を守るとの要望により、「本県初・全国初のホタル護岸工法」で実施し、昭和49年度に完成しました。

護岸部は、蛍が羽化する時這い上がり易いように萩市笠山の安山岩の石積みとし、流速を抑えるために川を蛇行させ、木杭を設け、セリ、ヨモギ等低い草を植えて、日陰をつくり蛍の生育環境を確保するよう工夫しました。

このホタル護岸による河川改修により、一の坂川は再び蛍の乱舞する河川として蘇りました。

また、大殿小学校では児童が河川清掃を行うほか、地元環境保全団体との共同で蛍の養殖やエサであるカワニナの採取を行うなどの保護活動を行っています。

このように一の坂川の蛍は地域住民に愛され、毎年蛍が乱舞する6月上旬の土曜日には「ほたる観賞Week」が開催され、山口の初夏を代表する風物詩となっています。

